

---

# 【捨て犬・イエス】

シュリンケル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【捨て犬・イエス】

### 【Nコード】

N3780R

### 【作者名】

シュリンケル

### 【あらすじ】

捨て犬”イエス”。彼は監獄で死を迎えようとしていた。消え行く小さな命にやがて訪れた奇跡とは・・・  
ハッピーで優しい世界をお楽しみください。

## 1 プロローグ（前書き）

このお話はフィクションです。多くは筆者の推測によるものです。  
（しかし、失われる命を思えば真実に近い部分もあると思えるので  
す）

重い話でも読みやすくなるようにがんばります。応援よろしくお  
願いします。

## 1. プロローグ

- わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。  
- なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか。

(My God, My God, why have you  
forsaken Me? Why are you so far  
from helping Me, And from these  
words of My groaning?)

聖書・詩篇22篇より

堀の外にはごうごうと音を立てて雪が吹きすさび、コンクリートに囲まれ暗くじめつとした監獄の床で、僕は死の淵を彷徨っていた。

ここは寒い。

何も考えられないほど。

(監獄の寒さの下では何もかもが損なわれるのだ。)

僕の名は”イエス”。

看守の人たちの言うところでは、そういうふうに呼ばれている。

見た感じ、生まれて1ヶ月じゃないかな? と看守のバンドーが言う。(優しい目で)

なんだかすぐに死んじゃいそうだね、と看守のカトーが言う。(冷たい声で)

ジャッククラッセルテリアにはこの冬も監獄も辛すぎる、と彼らは言うのだ。

（僕は震えながら彼らのささやく声を聞き取る）

僕はいつ生まれたのか、よくわからないと彼ら（看守）は言う。僕が意識を感じたのは、この監獄が最初だ。

（その前の事は、おぼろげな記憶だけが断片的に残っている）

- - -

僕はこの監獄で目覚めて、初めて意識が芽生えた。（と思う）

それは突然に起こったのだ。

「さあみんな、朝だよ！」一人の看守が鉄の桶を叩いて歩き回る。

その声が言葉となって、僕の耳に突然届いた。

僕は監獄の壁の右上にくり抜かれた窓から射し込む一筋の”光”を感じたんだ。

・これが”朝”の光。僕はそう感じたんだ。

光は真っ直ぐに僕の汚れた身体を柔らかく包み、じんじんとその温もりを伝え始めた。

僕はじっとその温もりを受けた。（どのみち、動けなかったんだくれど）

それは不思議な感覚だった。

その光は僕の体中の痛みや痒みを癒し、生きる希望を与えてくれたのだ。

僕には見えただ。

光の中に、小さな小さな生き物が見え隠れしているのを。

（その小さな生き物はぶるぶると震える・震えながら光を発している）

彼らは僕に言う「僕の心に直接伝えてくる。

彼らは”愛”そのものなのだ」と僕に伝えてくれたのだ。

そうして、彼らの意志は僕の中にゆつくりと染み込んでいった。  
光と共に。

> i 1 9 2 8 7 — 1 7 6 7 <

## 1 プロローグ（後書き）

今回は「監獄のルール」です  
ワンコは死んでしまうのか？

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

## 2・監獄のルール

僕は一日のほとんどを寝て過ごした。

汚れた（しかし暖かい）毛布は力の強い犬達の寝床になっていて力の弱い犬達は硬く冷たいコンクリートの上で丸くなって寒さに耐えるしかなかった。

僕ら（犬達）の間にはしつかりとした力関係が成り立っている。その関係は強さによって、均衡を保たれている。

そして一日に何度か、その力関係を再構築すべく決闘が行われた。

今日も一匹の大型犬が、力の強いボス犬（この部屋には何匹かのボスがいた）に決闘を挑んでいた。

殺意に満ちた目でボスの目を見つめて合図を待つ。  
（それが決闘のルールだった）

挑まれた側のボス犬（彼は西側の毛布を二枚確保していた）は毛布の上で顔を上げると静かに見つめ返した。

ボス犬の耳はピンと立ち、鼻がひくひくと動く。敵の強さを測っているようだ。

ボス犬の見返す目つきを合図に、大型犬がぐるるっ、と低く唸る。

じりじりと大型犬が近づく。ボスは動かない。

鼻先が触れ合う距離まで近づき、大型犬が口を大きく開け、牙をむ



き出す。

それを見てボスが動き出す。

しっぽをぴんと立て、身体をゆっくりと起こす。

背中の毛が毛羽立つ。

ボスは音も立てずにしなやかに飛び掛った。  
それは一瞬だった。

ガオつと低く唸った次の瞬間に、ボスの牙は大型犬の喉下を捕らえていた。

大型犬のギャオンっと言う泣き声が終了の合図となった。

しっぽをしゅんと丸めて大型犬が部屋の隅にとぼとぼと逃げて行く。  
硬いコンクリートの床にそつと丸くなる。

それがその日の決闘だった。

僕達は目を伏せてその後をやり過ごした。

（それは、この監獄のルールだったのだ）

## 2・監獄のルール（後書き）

次回予告・・・「死の予感」

感想、ご指摘、よろしくお願いします。

### 3・死の予感

監獄の中で、誰よりも小さく弱い存在の僕のことを、周りの犬達は威嚇すらしなかった。

それは何故か？

答えは死にかけていたからだ。

呼吸は細くなり、痛みの感覚すら遠くなっていた。

僕の口の中には常に不吉な鉄の味がしていたし、身体からは蚤のみすらも逃げ出していた。

（死に行く生き物には蚤すらも寄り付かないのだ）

看守・カトーの予想（すぐに死ぬだろう）は実を的を得ていたのだ。

- - -

「さあみんな、朝だよ！」今日も一人の看守が鉄の桶を叩いて歩き回っていた。

それは、朝ごはんの合図でもある。

周りの犬達がそわそわと起き上がり、鉄格子に集まる。

僕は起き上がるうにも身体が鉛のように重たくて、そのまま丸くなっている。

でもお腹がすいたな、と思った僕は起き上がろうとした  
その時だ

どすん、と僕に一匹の犬がもたれかかる。

どすん、ともう一匹の犬が反対から座り込む。

僕は起き上がる事もできないままじっとしていたんだ。

やがて鉄格子の向こうから看守達が食事を持ってくる。

（いい匂い！）

だけど僕の両側には大型犬がもたれかかり、僕は動けなかった。

仕方なく、僕はみんなの食事の音をぼんやりと聞いていた。

看守達は鉄格子の一部をぎいっと開けた。

僕の両側にもたれた犬達が身体を緊張させていた。

（僕はもたれかかる大型犬の後ろからその光景を見ていた）

必死に食べまくる犬達を、看守はしばらく眺める。一匹ずつ、見比べては指を刺して歩く。

そして監獄にいる半数近くを、看守達は監獄から連れ出した。

（散歩に行くのかな？と僕はぼんやりと見ていた）

そうして犬達は違う場所へと移動して行く。 - それきり彼らは戻っては来なかった。 -

その後、看守達は隣の監獄でも同じ作業を繰り返していたようだ。

僕を両側から抑え付けるように座り込んでいた大型犬達は、大きくあくびをするとようやくその場を離れた。

僕が大型犬たちを見上げる。

彼らが僕を見下ろす。

『ご飯を食べな』 大型犬の一匹が僕に言う。

僕はよたよたと歩き、わずかに残ったごはんを食べた。

お腹は空いているのに、僕は食べた後に吐いてしまう。（固形物を身体が受け付けられないのだ）

僕が吐いたごはんを、さっきの大型犬の一匹がすかさず食べた。

何度も噛み砕いて・・・僕の前に吐き出した。

『これを食べ』と彼は言った。

僕は、それを食べた。（今度はなんとか飲み込めた）

その大型犬は僕の耳の匂いをしつこく嗅いで、何かを納得したかのようにふんつと鼻息を飛ばして言ったのだ。

『お前は生きろ』と

> i 1 9 3 7 6 — 1 7 6 7 <

### 3・死の予感（後書き）

次回予告・・・「生きる」

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（細部は作者の創作です）

## 4・生きる

僕に”生きる”と教えたのは、名も無き大型犬だった。ラフ・ドール・レトリバー

僕は彼を”ドン”と呼ぶことにした。（看守達がそう呼んでいたからだ）

ドンは僕にぽつぽつと伝えた。

”朝ごはんの向こう側”の意味を。帰らないお散歩の意味を。

- - -

朝ごはんを食べさせている間に、看守達は彼らが連れ出す犬を選別すると言う。

そしてお散歩に出かけた犬達はここから離れた場所に集められていくらしい。

（ドンは遠く離れた気配からそれらを察した）

連れ出された犬達の気配は、やがて他の犬達の気配と交じり合う。どうやら相当な数の犬達が一箇所に集まっている。

そしてその場所から、さらに窮屈な場所へ移動するようなのだ。

（不安そうな泣き声がここまで聞こえてくる）

やがて看守達のくぐもった声が飛び交い始める。

その時の声は、感情を押し殺した冷たい響きだと言う。

そして大きな何か（おそらくは壁）が動き出す音が聞こえる。

その向こうから小さく泣き声が聞こえてくる。とてもたくさんの泣き声。

泣き声は何かに遮られ、やがて何も聞こえなくなる。

静寂の中、ドンのかすかに「しゅー」という奇妙な音を聞きとる。

それがドンの知っている全てである。

- - -

ドンは言う。僕は”生きる運命”にあると。そういう匂いがするのだと。

『昔、俺は教会に住んでいた』とボスが言う。

『そこでは”死ぬ運命”と”生きる運命”の匂いをよく感じていたよ』

ドンが言うには、教会という場所に訪れる人々の中に、とても深刻な場面に立たされた人を見かけたらしい。

とにかくだ。とドンは僕を見つめて言う。

『お前には”生きる運命”の匂いがするんだよ』

鉄格子の向こうで、看守・バンドーが何かを取り出す。

(あれはラジオだよ、とドンが教えてくれた)

ラジオと呼ばれた鉄の箱を看守がカチャカチャと操作すると、不思議な音が流れて来た。

Get Lost - Eric Clapton -

この音は”音楽”なのだとドンが言う。

『人達のこととはあまり好きになれないが、”音楽”はいい』と



ドンは目を細めて聞き入る。

僕もドンにもたれかかって音楽を聞く。

監獄の小さな窓から再び光が射し込む。

僕は光の中に包まれてうっとりとする。

そして僕は、光の中に再びあの生き物を認める。

それはぶるぶると震えて踊っていた。僕はそれをドンに伝えた。

ドンは言う。

『それは”妖精”だ。見える物は幸せになれるらしいが・・・そうか、お前には見えるんだな』

嬉しそうにそう言うドンはいびきをかいて眠りについた。

ぶるぶると震えるたびに”妖精”は光を帯びる。

きらきらと光の粉が舞う。

まるで祝福するかのように、光のダンスはいつまでも続いていた。

> i 1 9 3 7 7 — 1 7 6 7 <

#### 4・生きる（後書き）

次回予告・・・「ドンの教えと神の教え」  
ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。  
（細部は作者の創作です）

## 5・ドンの教えと神の教え

ドンが教えてくれたこと。

むやみに吠えない。

むやみに鳴かない。

おしっこをする時はよく嗅ぐこと。（色んな情報が詰まっているから）

うまくいかない時には辛抱強く待つこと。

危ないと感じたらしっぽを丸めて静かに逃げること。

今日を生きていることに感謝すること。

そして・・・生きる希望を最後まで捨てないこと。

ドンはとても優しい目で僕を見つめて、それらのことを教えてくれたのだ。

- - -

それは厳しい冬の寒さが止み、つかの間の陽気に包まれた日だった。

監獄の中で、僕はドンの背中に守られていた。

鉄格子の向こうでは、看守・バンドーとカトーが世間話をしている。

「なあカトーさん」とバンドーが話しかける。  
「家庭を持つってどんな感じなんだろう？」

カトーは珍しいものを見たような顔をバンドーに向ける。  
「どうしたんさ、そんな事聞くなんて。独身主義のバンドーちゃんよ」

ん、ちょっとね。と言ってバンドーは口ごもった。

しばらくの間、バンドーがラジオをいじり、いくつもの番組が断片的に流された。

「なんかあつたんか？」とカトーが聞く。

うーん、と唸ってバンドーは顔を上げる。

「好きな女が出来たんだ」  
バンドーがつぶやく。

「俺にはもったいないような女なんだ」

ふーん。とカトーが鼻息まじりに相槌を打つ。

「でも」とバンドーが再び口を開く。  
怖いんだ。とバンドーは言った。

なにがだよ、とカトーが聞く。

うーん。

コンクリートが剥き出しの室内にバンドーのため息が響く。

そしてバンドーは話し始めた。

彼女の素朴さと優しさについて。

たとえ冷たい雨に打たれたとしても、優しく温めてくれるその人柄を。

彼女はもっとバンドーを知りたいと言う。

バンドーの仕事を見てみたいと言う。

それが怖いのだと、バンドーは言う。

「それってどうよ？」

バンドーが監獄に目を向ける。

辛そうに、僕達を見つめる。

「動物愛護センターは・・・動物を殺すだろ」

そう言っと、バンドーはタバコに火を点けた。

看守達のラジオからその言葉が流れたのは、その瞬間だった。

- わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。

- なにゆえ遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かれないのですか。

その言葉は「聖書・詩篇22篇」の一節なのだとラジオは伝えていた。

神の子・イエスが父（神）に断絶され、十字架に掛けられてイエスが叫んだ言葉。そんな風にラジオは伝えていた。

僕は・・・その言葉に反応した。

僕は抑えきれずにきゅんきゅんと鳴いたのだ。  
看守たちが驚いた顔を僕に向けていた。

鉄格子の向こうで燃えるストーブに掛けられたやかんから、激しく湯気が湧き出していた。

> i 1 9 4 5 9 — 1 7 6 7 <

## 5・ドンの教えと神の教え（後書き）

次回予告・・・「バンドーの恋人」

感想、ご指摘、よろしく願います。

（細部は作者の創作です）

## 6 バンドーの恋人

厳しい寒さが和らいだその日、わたしは坂東の仕事場へ見学に向っていた。

わたしが坂東と知り合ったのは、先月のこと。

女友達三人で久しぶりのお茶会（というか飲み会）にテンションが上がった私達は、カラオケBOXで二次会を楽しんでいたの。

「エリー！次はあんたのために歌うわよっ！」と叫ぶのは親友のカナ。

（彼女はお酒が入るといつも弾けるのよね）

カナが”愛しのエリー”をいつものように唄ってくれた。曲がサビに差し掛かり、カナの歌声に力がこもる。

「えーりーりーりー」 わたしを熱く見つめるカナ。

「そおーりー」 わたしに迫るカナ。

「すいーりーりー！！」 マイクを投げ捨てわたしに抱きつくカナ。

相変わらず面白い奴だわよ。

そんな私達を大笑いして写真に撮りまくるのは親友のミナ。

ちなみに、お酒の入っていない時のカナは同一人物とは思えないほどにおしとやかなのよ。

わたしがピアノ演奏を担当している結婚式場で、彼女はとても清楚に案内嬢を務めているわ。



それとミナは結婚式場のカメラマンなの。（わたしたちの姉貴って感じね）

歌い終わったカナは盛り上がりすぎて部屋を飛び出していく。  
きつとナンパに行ったんだわ。

「カナって自由よね」と言っただけでわたしとミナは笑う。  
きつと酔いが覚めたら何にも覚えていないのだろう。

やがてカナは男子を三人連れて帰ってきた。

カナを両脇で支えあう男子二人はちよつと軽い感じのハンサム君達。  
その後ろで赤くなっていたのが・・・坂東だった。

（彼を見た瞬間、なぜだかわからないけどドキっとしたわ）

二人のハンサムは最初のうちこそ礼儀正しく見せていたけれど、  
カナが酔っ払ってもたれかかるのを見ると露骨に口説き始めた。

（その時点で危ないな、とは感じていた）

「う、気持ち悪い」と言い出したカナをトイレで介抱していると、  
ハンサム二人がいきなり入ってきた。

「俺らが替わるよ」と彼らは言っただけで無理やりわたし達をトイレから  
追い出した。

これは危ない。わたしは何かトイレに押し入ろうとするのだけれ  
ど、ドアはびくとも開かなかった。

坂東が走ってきたのはその時だった。

ドアが内側から固定されているのを見ると、彼はいきなり横向きにドアを蹴り上げた。

そうとう強い力で蹴ったのだろう。

ドアは枠ごと壊れ、内側で押さえていたハンサムの一人がトイレの壁に叩きつけられた。

トイレの個室でカナを押さえつけていた、もう一人のハンサムが真っ青な顔で振り向く。

坂東が静かに見下ろす。

ハンサムは歯をガチガチと鳴らして震えた。震えて許しを求めた。

「みんなに謝れ」坂東がハンサム二人に言う。

彼らはトイレの床に正座してわたし達に謝った。そしてみんなの会計を二人で支払って帰っていった。

「どうもすみませんでした」坂東は深く頭を下げる。

とんでもない、とわたしは言った。けしかけたのはカナだったわけだし。

「それでも、怖い思いをさせてしまった」そう言って再び頭を下げる坂東。

あなたの連絡先を教えて。とわたしは言った。

それが私達の出逢いだった。

それからわたしは坂東に連絡を取り、二回目のデートで恋人となった。

-  
-  
-

そして今日、わたしは彼の仕事場を見学するのだ。  
”動物愛護センター”を。

> i 1 3 9 8 2  
— 1 7 6 7  
<

## 6 バンドーの恋人（後書き）

次回予告・・・「職場見学」

ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（細部は作者の創作です）

## 7・職場見学

センターの名称から、わたしはもっとほのぼのとした（動物園的な）風景を想像していた。

道路越しに見える”動物愛護センター”は色気もないけど清潔そうな建物だったわ。

飾り気のない門をくぐり、建物に近づく。

入り口手前の広場には小屋があり、ヤギとうさぎがいた。

とても暇そうに草を噛み続けるヤギと眠り続けるうさぎにバイバイと手を振り、わたしは建物に入る。

- - -

役所を思わせる小奇麗な館内。

ふうん、坂東はここで働いているのね。とわたしは周りを見渡した。

右手に設けられた「受付」窓から顔を覗かせた職員のおじさんに、見学の予約をしている事を伝える。

「若菜さんですね。伺っております。さっそくご案内いたします」とおじさんが立ち上がる。

「館内はそんなに広くはないんです」とおじさんは歩きながら話し

始めた。

「一周するだけならすぐに見終わっちゃうんです」おじさんは案内板の前に並んだ冊子を手に取る。

案内の前にご説明しましょう。そう言っておじさんから渡された案内冊子をわたしは読んだ。

\*\*\*\*\*

（参考資料：東京都動物愛護センター・業務案内）

↓当センターは人と動物が共生できる街づくりを目指しています。↓

- 1・動物愛護精神と適正飼養の普及啓発

そのためにいくつもの活動を行っているらしい。

- 動物とのふれあい体験を通じて、動物愛護精神、動物による

危害の防止や衛生に関する普及啓発を行なう。

ふむふむ。ふれあいってステキね。

- 「動物ふれあい教室」、「犬のしつけ方教室」や動物に関する

相談対応など。（動物愛護週間でのイベント参加）

なるほど。イベントねえ。

他にもく講習会も催されているらしいわね。

- 2・動物の保護と管理

そのための活動が続いて記されていた。

- 主に飼い主のわからない動物の收容や治療を行っています。

これがセンターの主要活動みたいだわ。

- やむを得ない事情等により飼えなくなった、あるいは飼い主のわからない動物を拾われた場合に相談内容から判断の上で引き取っています。

うーん。飼えなくなったら持つてくる人もいるのね。

- 捕獲・収容した動物の収容期間は7日間（飼い主からの引取りを除く）  
え？7日間収容するだけなのかしら。

- 収容期間中に飼い主のわかった動物等を返還しています。  
うん。みんな見つかって欲しいわ。

- 愛情と責任をもって終生飼養し、他の飼い主の模範となり適正に飼うことができる希望者を対象に、講習会を実施したうえで犬・猫等の譲渡をしています。

そうか、譲り受ける事もできるのよね。ずっと飼い続ける責任は大切よね。

わたしは少し姿勢を正して、次の説明を読んだ。（それは全く予想していなかった。というか意識していなかった内容だった）

- 以下の場合には”殺処分”としています。

- ・収容期間を過ぎても飼い主が見つからなかった犬・猫等（譲渡できなかった場合）

- ・飼い主から引き取った犬・猫（譲渡できなかった場合）

- ・飼養管理が困難な生後間もない子犬や子猫

- ・治療が困難な負傷動物

わたしは目眩を覚えた。

\*\*\*\*\*

「ご希望の閲覧場所がありましたらご案内しましょう」  
読み終  
わったわたしに、笑顔で職員のおじさんが促してくれる。

わたしはしばらく深呼吸を繰り返す。

- 以下の場合は”殺処分”としています。

その一文がわたしの頭の中から消えようとはしなかった。

館内の温度が急に下がったように感じる。

ここは監獄のようだ、とわたしは思う。

わたしは職員のおじさんをまっすぐに見詰めた。

おじさんは困ったような悲しそうな表情でわたしを見ていた。

そのときだった。きゅーんきゅーんと切なげに鳴く子犬の声が聞こえてきたのは。



>  
 i  
 2  
 0  
 0  
 4  
 5  
 —  
 1  
 7  
 6  
 7  
 <

## 7・職場見学（後書き）

地震の影響でなかなか執筆できませんでした。  
みなさんは大丈夫でしたでしょうか？

次回は「殺処分・イエスの危機」の予定です。

## 8・殺処分・イエスの危機

「あの泣き声は？」 わたしは職員のおじさんに尋ねる。

（子犬の鳴き声がわたしの耳に張り付いた）

「犬舎から聞こえるようですね」とおじさんは答える。

引き取り手のない犬達を”収容”している場所なのだろう。

そこを見たいわ。とわたしは言った。

- - -

剥き出しのコンクリート。

壁の上方に開けられた小さな窓。

とても淀んだ空気。

（そこには犬の姿は見えなかった）

職員のおじさんが案内してくれたその場所は、牢屋だった。

鉄格子に背を向けて、設置されたスチール製の机。その上でラジオが音楽を奏でている。

机に座った職員の二人がわたし達に振り向く。

あ、と小さく驚いたのは坂東だ。

こんにちは、とお辞儀をする同僚の加藤さん。

どうも、とお辞儀をする坂東。（とても困ったような顔をしている）

おじさんが見学の旨を説明してくれる。  
わたしは二人に会釈した。

「子犬はどこですか」とわたしは聞く。  
「さっきまで鳴いてた子犬は？」

職員の加藤さんがわたしに答えた。（坂東は目を伏せていた）  
「これから処分されるところです」

今朝、残りの犬達は殺処分が決定したのだそうだ。  
地下室で処置されるところだと加藤さんは言う。

「坂東！わたし、その犬に会わなくちゃいけないの！」  
わたしは唐突に大声を出していた。

職員さんたちがびっくりした顔でわたしと坂東を見つめる。

「知り合いでしたか」と加藤さんがつぶやく。

黙っていてごめんなさい。とわたしは謝る。

「でもお願い。ワンちゃんに会わせて」 わたしは彼らに頭を下げた。

坂東がとても真剣な顔をしてわたしを見つめ、そしてわたしの手を握り・・・走り出した。

「おい！ちよつと坂東よお！！」後ろで加藤さんが叫ぶ。しかしわたし達は走り続けた。

- - -

わたし達は地下室のドアを開けた。

そこには、収容所（監獄）よりも一回り小さな部屋があった。犬たちは、鉄製の扉の向こうに詰め込まれている最中だった。（とてもたくさん犬達が鳴いている）

わたしはその瞬間に理解した。

犬達が死の恐怖に怯えていることを。

全ての犬達を救う事などできないことを。

そして坂東が犬達の中から一匹のジャックラッセル・テリアを抱きかかえた。

わたしは残りの犬たちに頭を下げる。ごめんね、と心の中でつぶや

く。

地下室の職員さん達にも頭を下げて、わたしたちは階段を上った。

わたしは怖かった。

あの部屋が。

そこで処置される全ての動物たちの悲劇が。

わたしは子犬を抱きかかえたまま、全身の震えが止まらなかったのだ。

坂東が心配そうにわたしを覗き込み、頭をなでる。

わたしが流す涙が、子犬の頭に落ちる。

そして子犬がわたしの顔を舐めた。  
涙をなめた。

わたしの涙は止まらなかった。

> i 2 0 0 4 6 — 1 7 6 7 <

## 8 ・殺処分・イエスの危機（後書き）

次回予告・・・「イエスの由来とエリーの誓い」  
ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。  
（細部は作者の創作です）

## 9 イエスの由来とエリーの誓い

子犬を抱きしめたまま泣き続けるわたしに、職員みんなは優しく接してくれた。

坂東が規律を破った事に対して、みんなに頭を下げてくれていた。

「本来ならいけない事だが・・・事情が理解できるから」と案内してくれたおじさんが言うと、職員さんたちは笑顔で許してくれた。

そうしてわたしは、飼い主としての諸々を学ぶための講習を受けた。（その間、坂東が子犬を預かってくれていた）

講習の内容は、冊子に記載されていた事柄の再確認だった。

（愛情と責任をもって終生飼養し、他の飼い主の模範となる事がテーマだったわ）

「約束してくれますか？」講習に当たった職員のおじさんにそう聞かれて、わたしは姿勢を正して答えた。

「誓います」と。

最後にわたしは、子犬の事について職員さんに聞いてみた。収容されていた間の様子などを。

「それなら、坂東君に聞いてみるといいですね。子犬は彼が担当した管理舎に居たのですから」そう言うと、おじさんは講習室から見える廊下を指差して微笑む。



わたしも振り返り・・・微笑んだ。

講習室を覗き込む二つの顔。

それは坂東と、彼に抱かれた子犬だった。

-  
-  
-

動物愛護センターの帰り道。

坂東の運転する軽自動車の中で、彼はわたしに教えてくれた。

子犬は収容された時、まだ生まれて間もない赤ちゃんだった事。  
毎朝の処分選別で不思議と目につかなかった事。  
なぜかボス犬が子犬を四六時中見守っていたらしい事。

不思議なのは、子犬に付けられた名前「イエス」の由来だった。  
毎日聞いていたラジオで聖書の朗読が始まる時、オープニングに使  
われる詩篇の文句で必ず鳴きだしたのだそうだ。  
（坂東はその一説を口にする。毎回流されるから覚えたそうだ）  
そのエピソードから子犬は「イエス」と呼ばれたのだ。

処分の直前にわたしが聞いた鳴き声も、そんな時だったらしい。

わたしは父から教わった聖書の文句を思い出す。

- わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。なにゆ  
え遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かれないの

ですか。

(My God, My God, why have You forsaken Me? Why are You so far from helping Me, And from the words of My groaning?)

(詩篇22篇 (マタイ27:46節))

原語で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」から始まるその一説をわたしは懐かしく思い出した。

神の子”イエス”が父に断絶され、十字架に掛けられて苦しみの中で叫んだ言葉とされている。

(しかし苦しみの後、イエスは再び神を賛美する。死の恐怖よりも尊い信仰を悟ったのだ)

わたしがそんなふうに話していると、子犬の”イエス”がきゅゅんと鳴いた。

(この子犬は、何かを感じたんだわ。そんなふうになわたしは思ったの)

わたしはイエスを抱きしめ、震える身体に暖かい息を吹きかけた。

イエスが嬉しそうにわたしの顔を舐める。(結局、イエスは家に帰るまでずうとわたしの顔を舐め続けていた)

坂東の運転する軽自動車の窓から、大きな夕陽が覗いていた。

そうして、わたしとイエスの生活が始まったのよ。

## 9 イエスの由来とエリーの誓い（後書き）

次回予告・・・「新たな生活」

感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（細部は作者の創作です）

## 10・新たな生活

僕は夢を見ているのだろうか。

朝の木漏れ日が暖かく降り注ぐ。

僕の身体に。僕の眠るふかふかの毛布の上に。

僕は生きてるんだ。

-  
-  
-

”ピッピッピッピッピ・・・”

聞きなれない音が隣の部屋から響き渡る。

（僕は身体を固くして身構えた）

やがて、部屋の奥ではたたと物音が続き、僕のところへ駆け寄って来る。

”エリー”だ！

僕は緊張を解いて、全身で喜びを表現する。

ありがとう！（助けてくれて）

大好き！

エリー大好き！

「おはよう！イエス！」

エリーが僕を抱きしめてくれる。  
うれしい！！

そしてエリーが僕の身体にひものような物を巻きつける。

（これなあに？）

僕はエリーに尋ねる。

首を傾げた僕を見つめると、彼女は「かわいい！イエスってばかわいいー！」と喜びの声を上げる。

「これはね、お散歩の時につけるものよ。リードを固定するためにね。そしてお外に遊びに行くの」

（お散歩？それって怖くない？）

再び首を傾げた僕を、エリーは笑って抱きしめた。

それはステキな一日の始まりだったんだ。

> i 2 0 2 4 0 — 1 7 6 7 <

## 10・新たな生活（後書き）

次回予告！「お散歩」

感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（細部は作者の創作です）

## 11・お散歩（そしてドッグラン！）

玄関のドアを開ける。

お外の爽やかな空気が吹き付ける。

（さむーい！でも気持ちいい！）

身体をぶるぶるっと思い切り震わす。外の空気は僕に元気を分けてくれる。

エリーが「じゃあ、お出かけしよう！」と合図する。

ワン！！と僕は一声鳴き、走り出す。

なんて表現したらいいんだろう。

僕は道の真ん中で思わず立ち止まり、辺りの匂いを胸いっぱい吸い込んだ。

冬の寒さの中に、次の季節の匂いが感じられる。

たくさんの植物の匂いが満ちている。

空を見上げると、たくさんの鳥たちが横切っている。

猫の匂いもする。

仲間（犬）の匂いもする。

たくさんさんの情報が、漂っている。（犬である僕達は、匂いから情報を学ぶのだ）

僕は、飽きることなく周辺の匂いをチェックして歩いた。

- - -

そしてエリーが連れて行ってくれたのは”ドッグラン”だ！  
（ドッグランでは自由に走り回れるんだって！）

大きな目の柵に囲まれたその場所は、土の地面がむき出しの広場だったんだ。

柵の中に入り、リードを外されて、僕は背中を押された。

わーい！

僕は広場を駆け回った。

（たぶん、尻尾とかまわなくなっていたと思う）

そこには、いろんな犬が集まっていた。

彼らが言うには、ここは社交場らしい。

最近どうなの？危険な情報はなかった？ と彼らは常に確認していた。

僕は正直に今までの経緯を話した。

死に掛けた事や、監獄から助け出された事などを。



彼らは口を揃えて教えてくれた。

君は非常に運がいいって。

そして、ここにいる僕らみんなが運がいいんだって。

”命を与えられた” なんだって。

それが僕らの主な会話だった。

「ペットだからねえ」 その日、柵の端に近い木の根元で僕はおしっこをかけながらトイマンチエスター・テリアのオス犬と会話をした。

ビルと呼ばれたその犬は、寡黙に話を続けた。

「ペットは飼い主によって人生が決まるんだねえ」 と彼は言う。

「君は本当にいい飼い主に出会ったね」 彼はそう言うとしっぽを振って祝ってくれた。

僕は帰り道、” 飼い主” エリーを改めて見上げた。

彼女は視線を感じて、僕をすぐに見つめてくれた。

「これが「家族」というものなんだろうか。  
僕は首を傾げる。

何かが伝わったのだろうか。

エリーが僕を抱き上げる。

「あたしたちは、”家族”だよ！」

これは『奇跡』だよ

> i 2 0 3 7 5  
— 1 7 6 7  
<

11・お散歩 (そしてドッグラン!) (後書き)

次回予告!「家族の始まり」

感想、ご指摘、よろしくお願いします。

## 12・家族の始まり

あの日から、”イエス”はわたしの家族となった。

動物愛護センターから坂東の車に乗って、わたしの住むマンションに連れ帰ったあの日。

帰り道に見かけたペット用品専門店で、”イエス”は坂東からささやかなプレゼントを贈られた。

犬用のトイレ。

寝床には暖かい毛布。

水飲み用の入れ物。

ごはんの入れ物。

散歩用のリードと胴輪。

食べ物には缶詰やカリカリのドッグフードを。

（食べ物には自炊でも可能だと教わったわ）

帰り際に渡された、イエスより大きな”ぬいぐるみ”。（これはイエスの一番お気に入りになったの）

坂東はわたしに言った。

「ありがとう、エリー」俺はエリーを誇りに思うよ、と彼は言ったのだ。

でも、と言いかけるわたしの事をイエスと一緒に抱きしめる坂東。

「たとえ一匹でも、エリーは救えた」

その言葉が分かったのか、わたしと坂東の顔をイエスがぺろぺろと舐めた。

玄関先でイエスを抱いたまま坂東を見送り、わたしは空を見上げた。

空には三日月が浮かんでいた。（明るく密やかに輝いていた）

- ベルガマスク組曲 第3曲「月の光」 （ドビュッシー） -

わたしの中で、曲が流れ始めた。

イエスはわたしの顔を見つめ、そして三日月に顔を向けた。

風が吹き、わたしとイエスは見つめ合う。

そうしてわたしたちは、我が家に戻ったのだ。

三日月に見守られて。

> i 1 3 0 9 2 — 1 7 6 7 <

## 12・家族の始まり（後書き）

次回予告！「夢の続き」

感想、ご指摘、よろしくお願いします。

（細部は作者の創作です）

### 13・夢の続き

ふと気がつくと、僕は真っ黒な闇の中で佇んでいた。

辺りを見渡して鼻をひくひくと動かし、匂いを確認するけれどこの場所を示す情報が僕には確認できなかった。

僕の鼻、どうかしちゃったのかな。

不安になってふらふらと辺りを歩いてみる。  
歩くたびに足元の地面がふわふわと揺れる。

ここはどこ？エリーはどこにいるの？

僕の不安は大きくなり、周囲の闇は深みを増して行く。

僕は闇の一番暗い部分へ向けてやみくもに歩いてみる・・・そこで僕は分厚い”壁”に突き当たった。

その”壁”は僕の侵入を拒んでいるように感じた。

しばらくすると壁の向こう側から何かが近づいてくる音がした。  
僕は気配を伺う。

『ようイエス』  
闇の壁がぶわわつと震え、壁から何かが滲み出してきた。

「・・・ボス？」  
僕は小さな声で聞いてみる。

『ああそうだよ』　ボスはとても低い声で僕に答える。

でも僕にはボスの姿がうまく見えなかった。

「ねえボス、よく見えないよ。あんたが見えないよ」　と僕は言うてみる。

ボスは首を振った。

それでいいんだよ、と首をふるのだ。

『いいかい、イエス。俺はもう死んだんだ』　とボスは話を始めた。

-　お前は生き延びた、とボスが言う。

俺の言った通りだっただろ、と嬉しそうに言う。

俺は死んでこれからあつちの世界に行くんだ。

なんだか随分楽しい事になるらしいが、それは死んだ奴の特権さ。お前はこつちの世界を楽しむんだ、その義務があるんだよ。

何のために生きるのかって？

そんなの分からんよ。　-

『その答えはお前が自分で見つけるのさ』

そついうとボスの形をした影はすうっと壁から消えていった。

ボスが消えると壁は闇と共に消え始めた。

そつして僕は夢から覚めたのだ。



- - -

目を開けた僕を心配そうに覗き込むのは・・・エリー！

僕のご主人様だ！

僕は身体を起こし、全身で表現する。  
ありがとう！うれしい！大好き！って。

エリーは僕のキスを顔中で受け止めて抱きしめてくれる。  
「おはよう！イエス！」

夢の続きは、ステキな現実だったんだ。

> i 1 7 9 9 5 — 1 7 6 7 <

### 13・夢の続き (後書き)

次回予告！「イエスの笑顔」

感想、ご指摘、よろしくお願いします。

(細部は作者の創作です)

## 14・イエスの笑顔

わたしの住んでいるマンションには二つの利点があった。

音楽とペットに寛容であることだ。

防音効果を施した事でそれらを許容できたのだろっ。

（なんにしろ、イエスにとっては幸せなことだったのだ）

わたしは仕事柄、家でもピアノを弾く。

（前にも言っただけれど、わたしは結婚式場の専属ピアニストなの）

まさかペットまで飼うとは考えもなかったけれど、おかげでイエスと暮らせると言っわけなのよ。

それに・・・イエスはピアノも好きだった！

（それはわたしたちが暮らす上でとても大切なポイントだったの）

それからわたしは、大切な報告をしなければならなかった。

それは父。

わたしの気ままな生活を応援してくれる父。

怒ると怖い人だけれど、大事なところでは頼りになる。

大切な事だけは報告するのがわたしたち親子の約束なのだ。

- - -

ブルブル・・・その夜わたしはイエスを膝に抱き、父に電話をかけた。

「もしもし」 低い父の声。

あたしよ、パパ。と答えた瞬間、父の口調はコロッと変わる。

「エリー！元気か？わしゃあ寂しいぞ！」 相変わらず父はひょうきんだ。

わたしと話すといつも広島弁丸出しなの。

仕事中の父はともいかつくて怖い人らしいけど、わたしにはちよつと想像がつかない。

うわさによると仕事場ではクールでスマートなのだから。（標準語しか使わないらしい！）

「元気よ。パパは元気？仕事は順調？」 これがわたしとパパのいつもの挨拶。

「うーん。元気かのう……。ダメかもしれんのう。エリーの手料理でも食べん限りは……。ダメかもしれんのう」 これもいつものパパの口癖。

父は数年前から都市銀行の頭取として頑張っているらしいけど、わたしの前では仕事の話なんてほとんどしない。ほんとに仕事大変なのかしらと不思議に思うわ。

ひとしきり父のおふざけに合いの手を入れた後で、わたしは本題

を話した。

動物愛護センターでの出来事からイエスを引き取った事までを。

「わたし、間違ったかしら」 と聞いてみる。

「エリー」 しばらく黙った後に父は口を開いた。

「わし・・・嬉しいよ」

そして父は言う。「さすがはわしの娘じゃ！エリーは正しい事をしたんじゃないね！」

次の休みに早速見に行くよ、と父はなんだか感激しながら言っ  
て電話を切った。

わたしの膝の上で、電話の内容を心配そうに聞いていたイエスの  
頭を撫でる。

電話をテーブルに置き、わたしはイエスの鼻先に顔をくっつけて、  
これで心配はなくなったわ」とささやく。

わたしの言葉が分かったのか、イエスはちぎれそうなほどシッポを  
振り、わたしの顔を舐めた。

「あなた、わたしの言葉がわかるのかしら？」

わたしの言葉を理解したかのようにイエスは大きく頷いた。 何度も  
なんども。

そしてわたしは気がついたのだ。  
イエスはにっこりと笑っている！

「あなた笑ってるわね」 とわたしもつられて笑顔になる。

窓の外で明るく昇った満月もなんだか笑っているようだった。

> i 1 2 5 9 6 — 1 7 6 7 <

## 14・イエスの笑顔（後書き）

次回予告！「会話のきっかけ」

感想、ご指摘、よろしく願います。

（細部は作者の創作です）

## 15・会話のきつかけ

ハンガリー舞曲第5番嬰へ短調 - J・ブラームス -

鍵盤を跳ね回るわたしの指先に合わせるかのように、イエスがボールで遊んでいる。

鼻先でボールを弾き、ずだだーと走っては飛びつき、ボールに噛み付く。

そしてわたしを振り向き、わたしの演奏に耳を向ける。

ピアノの鍵盤を叩くたびに、首を右に左に傾げる。

それを見るのが嬉しくて、わたしはこの曲を何度も弾いてしまう。

「イエス。あなたピアノが好きなの？」 わたしは聞いてみる。

うん。とイエスが頷く。（そう言ったように聞こえたのだ）

驚いたことに、イエスは日に日にわたしの言葉を理解しているようだった。

（偶然だろうと思っていたが、試してみると何にでも頷くわけではないのだ）

お腹が空いた時に「抱っこかな？」と聞くと、首を傾げる。

「ごはんかな？」と聞くと、頷く。

こんな具合なのだ。

さっきそのことを坂東に話して聞かせたら、ふーむと唸っていた。



「イエスならありえるかも」と彼は言ったのだ。  
(隣でイエスがくしゃみをした)

イエス、あなたには秘密がたくさんありそうね。

- - -

ピンポンと玄関のチャイムが鳴る。

「エリーー!! 久しぶりじゃねえ!」

ドアの向こうで待っていたのは父だった。

「どれどれ。新しい家族を見せてくれんかのう」

父はそう言っ、イエスの姿を探し始める。

「イエス! わたしのパパが会いに来たのよ。ご挨拶しましょう」  
するとわたしの呼び声に答えるかのように、イエスが仕切りの後ろから顔を覗かせた。

こんにちは、と父が会釈をする。

とことことイエスは父のもとに歩いて来る。

父の足元でお座りをして・・・ぺこんと会釈をした。

「いい子! イエスはいい子じゃねえ!」 父は孫にでも会ったかのように興奮した。

「この子は・・・言葉が解るみたいじゃのう」

「パパもそう思う?。」

父はひと目でイエスが気に入ったらしい。

わたしはイエスのエピソードを改めて話して聞かせたわ。

聖書の聖句（詩篇22篇・マタイ27：46節・）のくだりを説明したところで、

わたしの膝に座っていたイエスははつとした表情で立ち上がり、ワ  
ンツと一声鳴いた。

わたしは父と目を合わせて頷きあつた。

やっぱり・・・偶然ではないみたい。

「こりゃあ、面白い！エリー！お前は素晴らしい家族に恵まれたか  
もしれん」

父の喜ぶ笑顔を見て、イエスがにっこりと笑った。

> i 2 0 8 2 9 — 1 7 6 7 <

## 15・会話のきっかけ（後書き）

次回予告！「コミュニケーション」相談役としての僕」  
ご感想、ご指摘、よろしくお願いします。  
（細部は作者の創作です）

## 16・コミュニケーション〜お友達〜

エリーと、エリーのお父さん。

彼らは僕を理解してくれたようだ。

（少なくとも、「もしかして」のレベルで）

どうやら僕は他の犬に比べて、彼ら人間の言葉が解るらしい。  
それに気がついたのは”お散歩”に行くようになってからである。

外の世界。

それは僕にとって奇跡の連続だったんだ。

- - -

散歩の途中で出会う僕の友達。

彼らと僕は常にお互いの情報を交換しあうのだ。

『いよ！大統領！今日もステキな匂いがするね』 彼はポチ。お調子者のビーグルだ。

『昨日さあ。道に落ちてた黒い物を食べちゃって・・・お腹痛いんだよなあ。お前も気をつけろよな』 彼はポメラニアンの子。食いしん坊だ。

『あら〜ん。イエスちゃん。あたしんち、すぐそこなのよ。遊びに来ない？』 彼女はメル。最近色気を覚えたウエルシュ・コーギーだ。（僕には荷が重いよ）

ある日のこと。

メル（色っぽいウエルシュ・コーギー）が僕に言った。

『ねえイエス。うちのご主人様ってあたしを見るたびに悲しそうに何かを訴えるのよ。何故かしらね？』

僕はエリー（ご主人様）と楽しそうにお話しているメルのご主人様の言葉に耳を向ける。

（僕が耳を傾けると、光の”妖精”が頭上に現れた）  
そして、人間達の言葉が僕の耳にすんなりと入ってくる。

『君は食べすぎてしまうからダイエットさせないといけないって。心臓に負担がかかるんだってさ』

僕は人間同士で話している内容をメルに教えた。

（当然、彼女にも理解できてると思っていたのだ）

僕の言葉を聞いて、メルが真剣な顔になる。

『あんだ、なんで分かるの？あたしの身体のコツを』 彼女はそう  
言って深呼吸をした。

そうして僕は説明したのだ。

僕が理解できる人間の言葉を。

みんなにも聞き取れると思っていた事を。

”言葉を全て理解できる”

その噂はあっという間に近所へと広まっていった。（交友の広いメルが情報源となったらしい）

その日から、僕は犬達の相談役に任命されることになった。

お散歩の帰り道、暖かさの混ざった強い風が辺りに吹き付けていた。

季節は春を迎えようとしていた。

> i 2 0 8 3 0 — 1 7 6 7 <

## 16・コミュニケーション〜お友達〜 (後書き)

次回予告!「みんなの知りたいこと」

感想、ご指摘、よろしく願います。

(細部は作者の創作です)

## 17・みんなの知りたいこと

公園の小高い丘の上に、とても強い風が吹き付ける。

「春一番、吹いたわねえ」 エリーに話しかけているのはポチ（ビグル・オス）のご主人様。

「春が来るのね」 とエリーが頷く。

『ご主人達は何つつてんだい？』 ポチが鼻を鳴らして僕に聞く。僕はご主人様たちの会話を翻訳する。（光の”妖精”がふわりと現れる）

『ほう。人間様つてえのはイキな事を言うもんだ。へえ。この風は”春”を運ぶのか』

ポチが頭を振ると、大きな耳がぱたぱたと揺れた。

お日様が暖かく僕達を照らす。

やがて、公園の向うから何匹もの犬達がそれぞれのご主人様と共に近づいてくる。

最近、僕が公園に来ると、気配を感じて様々な犬たちが集まって来るようになっていたのだ。

（メル（ウェルシュコーギー・メス）が噂を広げてくれたおかげなのだ）



『おつす！イエス！いい天気だね』

『ここで悩み相談してくれるんだって？』

青空の下、公園の丘の上のドッグランで、僕はたくさんの犬達に囲まれた。

僕は説明した。人間の言葉は理解できても、会話が出来るわけではない事を。

『みんなイエスに聞きたい事がたくさんあるみたいよ』  
メルという言葉を受けて、彼らは列になって僕の前に並んだ。

その日から、ウッドチップが敷き詰められた会場で、みんなの知りたい事が語られたのだ。

> i 1 5 7 8 1 — 1 7 6 7 <

17・みんなの知りたいこと (後書き)

終わりが近いかも。

## 18・みんなの知りたいこと2

恋はマジック (Could It Be Magic) - バリ  
I・マニロウ -

近くの商店街から流れてくるその曲を、相談者”バウ”（柴犬）が知りたがった。

僕はドッグランにいる人間達の会話から、偶然聞き取ったその曲名を彼に教えた。

『人間はこの不思議な音の事を”音楽”と呼んでいます』僕はそう言って説明する。

『音を奏で、感情まで表現するんです。それが音楽。音楽はそれぞれを”曲”として分けているんだ』

ふーむ。と唸ってバウは納得したようだ。

『音楽ってステキね』とメルがうっとりして耳を傾ける。

次の相談者は”ポチ”（チワワ）である。

ポチは言う。

『僕たちはお散歩で色んな匂いからニユース（情報）を教えてもらうじゃない？それをとてもご主人様は嫌がるんだ。なぜなの？』

良く聞く話である。

僕は説明する。

人間たちはペットである僕達（犬）の健康を心配している事を。変な物を食べたりして病気にならないように気をつけている事を。  
『それであんなに嫌がって怒っちゃうんだね。ありがとうイエス！  
良く分かったよ』

最後の相談者・メルが言う。

『わたしたちが人間ともっとうまく暮らすには、どうしたらいいかしら？』

そうだねえ。と僕が口を開くと、たくさん犬たちがお座りをする。みんなが一番知りたかった事なのだ。

そうして僕は、かつてのドンが教えてくれた教訓を彼らに語った。

- むやみに吠えない。
- むやみに鳴かない。
- うまくいかない時には辛抱強く待つこと。
- 危ないと感じたらしつぽを丸めて静かに逃げること。
- 今日を生きていることに感謝すること。
- そして・・・生きる希望を最後まで捨てないこと。

聞き覚えのある曲が商店街から流れた。

Get Lost - Eric Clapton -

空の向こうでドンが微笑んだような気がした。

18・みんなの知りたいこと2 (後書き)

次回・エンディング

## 19・エンディング

暖かい日差しの下で、わたしはイエスと芝生の上で座っていた。

わたしはふかふかのパンを一つちぎってイエスに与える。

そしてわたしも一切れ食べる。

はむはむとイエスは美味しそうにパンを味わい、わたしの顔を見つめる。

『何か言いたいみたいだね』 彼の瞳はそう言っている。（そんなふうに聞こえてくるの）

そうよ。とわたしは言う。

あなたの言葉はわからないけれど、わたしはあなたの心を感じるの。  
きっとあなたにはわたしの言葉がわかるのよね。

そうだよ！と言うかのように、イエスは一声わんつと吠える。  
千切れそうなほどにそのシッポを振る。

公園のハトが一斉に飛び立つ。（彼らは綺麗な隊列を組んで空を流れる）

「おい！」 丘の向うから、坂東が走ってくる。  
手を振りながら満面の笑顔で走ってくる。

わたしはイエスのリードを外し、坂東を指差して言う。「彼の所へ走るのよ、まっすぐに」

イエスはわたしにこっくりと頷き、笑顔で走りだす。  
(嬉しすぎてシツポが丸まっている)

イエスがジャンプし、坂東が腕を広げてイエスを抱きしめる。

「いい子だイエス！いい子だよ！」

彼らが笑い、わたしも笑顔になる。

イエスと坂東は仲の良い親子みたいだ、とわたしは思う。

彼らを見ていると愛しさが込み上げてくる。

わたしたちはイエスから教わったのだ。

”命”の重みと、イエスから常に感じる”愛”の暖かさを。

それはとても当たり前の事。  
だけれど、とても大きな力。

それがなんだか嬉しくて、わたしは坂東にキスをする。イエスがそこに割り込んで来る。

わたしたちは暖かい日差しを浴びて笑いあった。

ぽっかりと浮かんだ白い雲に見守られて。

- FIN -

> i 2 1 5 1 3  
— 1 7 6 7  
<



## 20・あとがき

【捨て犬・イエス】を最後までお読み頂き、ありがとうございました。

この話を書こうと思ったのは、本当に偶然でした。

ある日、ペットフードに付いてきた小さな説明書きを、わたしは読んだのです。

日常的にペットが捨てられている現実を。

そのペットたちが簡単に処分されている事実を。

（年間数十万匹の犬と猫が殺処分されているのです）

引越し先で都合が悪いなどの理由で愛護センターに持ち込まれるペットたち。

そんなことを今更のように知り、わたしは目の前ですやすやと眠る愛犬を見つめたのです。

そんなことから、この話を書いてみようと思ったのです。

彼ら「消え行く命」を調べているとき、わたしは偶然に詩篇22篇（マタイ27：46節）の一説を見かけました。

知人から聖書の話はいくつかレクチャー頂いていたのですが、この聖句は知りませんでした。

わたしは宗教を持ちません。けれどもこの言葉がなんだかしつくりきたのです。

もっとうまい表現ができたらな、と思います。

もっとステキなエピソードに膨らませたかったな、とも思います。

けれどもわたしにはこんなお話にしかまとめられなかった。

願わくば、読んでくださった読者の方々がペットに対して暖かい気持ちになればいいなと想うのです。

それでは、また。

- 2011・4・7・東京にて - シュリンケル

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3780r/>

---

【捨て犬・イエス】

2011年4月10日01時36分発行